

書道教育

書道助教授

豊田 宗 児

学校の教員というものは経験がものをいう職業であると思う。私自身も十五年間の教員生活の中で数多くの失敗をしてきたが、その失敗という経験を無駄にしないようにしてきたつもりである。先輩教員から常に言われたことは、「生徒指導の基本は教科指導にある。しっかりした教科指導ができなければ、しっかりした生徒指導にはつながらない。」ということだった。教科指導はその教科の専門知識の豊富さが最も重要になってくる。また、指導者本人の教科に対する「楽しさ」がにじみ出なければ、決して生徒は楽しさを感じてくれない。実技科目に於いてはその「楽しさ」は重要になってくると思う。殊に、書道や書写などの実技を伴う科目を担当していた私は生徒の反応からそう感じている。

また、教育現場では非常勤講師であろうが常勤講師であろうが正教員であろうが、その立場は関係なく、生徒にとっては同じ先生なのである。現場に立つ者はこのことを決して忘れてはならない。教科指導の内容はどの立場でもまったく同じなのである。教育現場では即戦力が要求される。その要求に応えるための講義が開講されている。

生活書式法

書道の教員は教育



現場に立つと、書道の授業以外での仕事も待っている。賞状や卒業証書の揮毫。トロフィーのリボン揮毫。行事の式次第や看板書き等々である。これらに対応できるための授業が生活書式法である。書式というものが、日本にはさまたま残っている。個人的には形式など取るに足りないこととは思いますが、知らなければ恥ずかしい思いをすることがある。のし袋の水引には「あわび結び」「蝶結び」「引き結び」などの結び方がある。ある留學生が、日本の友人の結婚式に出席することになり、お祝いを包んでいくと、注意を受けたのである。結婚式でのお祝いには、解けるという理由から「蝶結び」の袋の使用はタブーとされている。その留學生は「蝶結び」の袋を用いたのである。日本には、「郷に入っては郷に従え」という諺があるが、香典などは、相手の宗教に合わせなくても自分の宗教のしきたりで大丈夫と言われたことがある。この留學生も祝う気持ちを表すならば、自国の方法で祝っても問題はなかったのではないだろうか。

硬筆はこの授業では取り扱わないが、手紙・封筒・返信用はがき・履歴書・原稿用紙の書式についてはプリントを配布し補っている。例えば、履歴書は全国統一用紙や近畿統一用紙ができた背景を。返信用のはがきは「ご芳名」の「ご芳」は二本線などで消さなければならぬことを。原稿用紙では縦書きと横書きの数字の扱いが違うことや、読点も縦書き横書きでは異なることなどを説明しているのがそのプリントの内容である。これらのほとんどは中学書写の教科書で扱われていることなので、中学校国語の免許を取る学生には履修してもらいたいものである。しかし、書道教員になるために学習している学生諸君に最も重要なことは、篆隸楷行草の各書体を細字から大字までのしっかりとした書法を身につけることが不可欠なのである。



- 因に、今年度予定している教材を記しておく。
- ・手紙、封筒
 - ・のし袋
 - ・掲示物、ポスター
 - ・賞状
 - ・卒業証書
 - ・横断幕
 - ・立看板
 - ・式次第
 - ・表札
 - ・履歴書
 - ・原稿用紙

イギリス漫歩と 文学談義

英米文学 助教授

門田 守

イギリスの田園風景の中をぶらぶら歩き回るとは、本当に楽しい。最近の大学改組の風の吹きすさぶ中、英米文化事情などを教えなければならぬ身の上になったが、本当に教室で教えていて楽しいのは、ただそれだけイギリス小説である。切れ目のよい短編小説はダメで、やはり比較的文芸小説が良い。というわけで、ジェイン・オースティンの世界への旅にちよつとだけおつき合いたい。

ジェイン・オースティンといえば、やはりチョートンに行かねばなるまい。ロンドン・ウオーターloo駅からオールドン行き列車に乗り、二時間弱。まるで高原列車のような美しい雰囲気の中、小さなオールドン駅に着く。ドアは窓から手を出して、ノブを回して開ける。チョートンまで約二十分、オースティン

ン街道と呼ばれるオークの並木道をぶらぶら歩く。大人、数人分の腕が回るほど成長した木も多い。今は博物館になっているチョートン・コテージには、彼女が執筆した部屋がそのままに保存されている。匿名出版した彼女は、人が入室するとすぐに隠せるように小さな紙に几帳面に執筆したのであった。裏木戸の軸にわざと油を差さず、人が来るとわかるようにしてあったらしい。彼女の衣服、遺髪、原稿、老後に散歩に行けなくなったときに使ったドンキー・カートまで置



ジェイン・オースティン・コテージ

いてある。コテージの前を通る街道を進むと、弟エドワードの財産だったチョートン・ハウス、教会、そして母親と姉の墓を訪れることができる。この辺りの風景は基本的には十八世紀の当時のままである。

ジェインは基本的に南部の陽光なおばさんだったに違いない。今は取り壊されてしまったステイブントンの生家から郵便物が届くバブまで毎朝歩いたし、埃の舞い上がる道をたびたびロンドンに通った。生家近くの父親が牧師を勤めた教会の辺りは、彼女のお気に入りの散歩コースだった。また彼女は保守的な南部人にもかかわらず新しいものの好きで、顔を真っ黒にして蒸気機関車に乗って喜んだらしい。日本人はまず誰も行かないゴッドマーシャム屋敷まで、チャムから往復二十キロを歩いてみると、ジェインも好きだった田



ステイブントンの教会

舎の雰囲気がそのまま伝わってくる。街道から弟エドワードが眠るゴッドマーシャム教会を望むと、まさに夢的である。

文学を理解するには、まさにこうした具体的な事物に即した学習が必要だと思ふ。今や二コマまで文学プロパーの授業が激減したのであるが、写真・スライド、さらには当時の女をめぐる医学書、女子教育指南書、カテキズム(教師と生徒の問答集)などを通じて、より具体的にイギリス文学を感じられる授業を構築するよう模索中である。



ゴッドマーシャム教会